

社会をたのしくする障害者メディア



K O T O N O N E



VOL.18

特集

障害者が伝統職人になる

ぶっちゃけインタビュー14 岡 檀「病は市に出せ」

「脱福祉」から「超福祉」へ 15

内職仕事でも、平均工賃九万七〇〇〇円



二度の手術を乗り越え、
「スタイリストであり続けたい」という思いを貫いた

＊
シリーズ 障害者の就労事例 17
＊
KOTONONE
Series of Stories
vol.17

＊
スタイリストの星

二度の手術を乗り越え、
「スタイリストであり続けたい」という思いを貫いた

＊
シリーズ 障害者の就労事例 17
＊
KOTONONE
Series of Stories
vol.17

＊
スタイリストの星



二度の手術を乗り越え、
「スタイリストであり続けたい」という思いを貫いた

＊
シリーズ 障害者の就労事例 17
＊
KOTONONE
Series of Stories
vol.17

＊
スタイリストの星

「メモボード」で、 ヘアスタイルを相談

鏡を見て、仕上がりに満足。目の前に置かれた「メモボード」を手にとって「いい感じですね!」と書いた。小川季男さんは、それを見てニコリ。「ありがとうございます」と言いながら、カットクロスを外してくれた。

神奈川県相模原市、JR相模原駅から歩いて一〇分、もとは米軍の補給基地があった場所につくられた「西門商店街」。基地の名残か、幅の広い道路の両脇に、昭和の匂いが強く残った店が並ぶ。その中に、二〇一五年、「ルピナスヘア相模原店」がオープンした。スタイリストの小川さんは、聴覚に障害がある。お客さんとのコミュニケーションは、「メモボード」のような筆談ツールを使って行う。

「ルピナスヘア」のオーナーの浅川雅之さんも、難聴者。子どもの頃、高熱による後遺症だった。健常者の三割程度の聴力しかなく、苦勞したという。現在は手術を受け、七割程度に回復、日常生活には支障がない。浅川さんは、理容師の資格を取り、一九八四年に

お客さんとマンツーマンで接する美容師は、高いコミュニケーション能力を要求される仕事だ。難病に苦しみ、二度の手術の後でろう者になった小川季男さん。

コミュニケーションには大きなハンディを背負ったが、「スタイリストでありたい」という強い思いで、それを乗り越えた。

理美容室を開設。その時から聴覚障害者を雇用した。さらに、昨年、聴覚障害者が運営までする店をつくろうと思ったきっかけになった出来事がある。

**スタイリストを目指す
ろう者が減っている**

「全国のろう学校で、理美容科があるのは、平塚と福岡の二校だけなんです。平塚ろう学校とは、以前からつながりがあったのですが、理美容科を希望する生徒が、だんだん減ってきている、という話を聞いて」。なぜ減っているのか、いちばんの原因は、卒業しても、働く場所がないことだ。「何もサポートのな



編集部=文
text by KOTONONE
信澤邦彦=写真
photograph by Kazuhiko Nobusawa

い職場では、障害があると、『コミュニケーションができない』と思われてしまします。だから、『一〇分カット』のような、お客様とのコミュニケーションが不要で、短時間でカットするようなお店で働かざるを得ない。せっかく身につけた技術のクオリティも下がってしまう。クオリティが上がらないから、単価も上がらない。収入も上がらない。だからモチベーションも上がらない。それで、この仕事から離れてしまう人が多くなってきた。これから入学しようという若者も、そのうわさを聞いて、理美容科を避けているのではないか。障害があるからこそ「手に職」を持ち、身につけた技術を生かして働き続けてもらいたい。若い頃にそう考え、スタイリストを目指した浅川さんだからこそ、その思いは強かった。

「彼らの働く職場をきちんとつくる
ことができれば、手に職を持ちたいという子が増えると思うんです」。そこで、一般社団法人「日本理容美容ビジネスの会」を立ち上げ、法人が運営する形で「ルビナスヘア」を開設した。開設にあたって求人募集をした時に、応募してきたのが、今の「ルビナスヘア」のスタイリスト・小川さんだ。

難病で、片耳ずつ音を失っていった

小川さんは三五歳の時に完全に聴覚を失った、中途失聴者だ。小川さんには、「神経線維腫症Ⅱ型」という持病がある。「特定疾患の難病です。神経が集まっているところに腫瘍ができ、放置しておくといずれ脳を圧迫し、死に至るという病気です。進行性で、今でも私の神経の周りには、小さな腫瘍が残っているそうです」。腫瘍を取る時には、その周囲の神経も一緒に取らなくてはならない。両耳の神経の周囲に腫瘍があると診断されていた小川さん、病気の進行にしたがつて、六年前、三〇歳の時に、まず右耳の神経を失い、昨年、三五歳で、両耳の神経を失った。

病気と診断されたのは、二六歳の時。小川さんは、すでにスタイリストとしてのキャリアを歩みはじめていた。「実は以前から兆候はあったのです。中学生の時には歩き方がおかしいと人から言われました。一八歳では、手まひがありました。二〇歳の時、小さな脳腫瘍が見つかりました。その時は



実際に片耳が聞こえなくなってみると、自分の想像とは大きく違っていました。

手術が怖くて、スルーしてしまいました。でも自分の体調は何も変わらなかった。自分で、自分でも忘れていました」。

一二六歳、突然めまいが起こり、グラグラと倒れた。「検査したら、前に見つかった腫瘍が大きくなっていた。その時、はじめて病気の名前や、どんな病気なのかを知らされました」。

「聞こえないこと」は自信も奪っていった

その四年後、病気が進行し、最初の手術を受けた。「一回目の手術をするまでは、普通にスタイリストとして働いていて。手術後は、すぐに仕事に復帰するつもりだったんですけど、実際に片耳が聞こえなくなってみると、自分の想像とは大きく違っていました」。

いちばん変わったのは、人とのコミュニケーションの取り方だ。「たとえばお店で買物をするときも、聞こえにくいので聞き返したりすると、嫌な顔をされることになりました」。聞こえにくくなったことで、コミュニケーションに対する意識が変わってしまった。「考えすぎだったのかもしれないけれど、『聞こえない自分が悪い』という気持ちになつてしま

いました。何回も聞きなおすのも悪いと思ったり。自分でもどうしていいか全然わからないですし、周りも、どう接していいかわからない」。

外に出るのが怖くなった小川さん。最初の手術の後、一年ほど、外に出られない時期があったという。家族の支えもあり、なんとか再び仕事をしなければという気持ちになって、スーツを着て、障害者雇用の合同説明会に行つたという。「一度、スタイリストを辞めようと思ったんです。外に出られなかった一年間、ハサミも手にしていませんでしたし」。ところが、三〇歳でほぼスタイリストとしての経験しかなかった小川さん。ほかに資格もなく、パソコンも使えない。自分でも、何ができるのか、何をしたいのかもわからないままに面談を繰り返し、質問への受け答えもあいま。六〇社ほど受けたというが「ここと全く全滅でした」。

やっぱり自分はスタイリストが好きなんだ

そんな時、家族から髪を切ってくれと頼まれた。「久しぶりにハサミを持つた時、『ああ、自分はこの仕事が好き



なんだ」と思いました。今まで、それしかやってこなかったから、あまり深く考えていなかったんですね」。

やっぱり、スタイリストがしたい。そこで、通える範囲の、めばしい美容室に片っ端から連絡をした。募集をかけているのがいいが、関係ない。電話で話をするのは難しかったから、ファクスを送った。五〇件くらいの美容室に連絡をとった。ほとんどの美容室は、何も連絡をくれなかった。返事があっても、障害を理由にした、断りの連絡だった。それでもめげずに、何件も連絡をして、ようやく、雇ってくれる美容室があらわれた。

「その美容室は、それまで障害者を雇用した経験はなかったんです。でも、私のことを応援してくれて。お客さんとのようにコミュニケーションをとりたいのか、一緒に考えてくれました」。当時、片耳は聞こえていたが、聞き取りにくいことや大切なことはメモボードを使ったり、ヘアスタイル雑誌などを一緒に見ながら、イメージを共有するなど、今につながる接客の方法は、そこでつくり上げた。二年間、パートタイムで働き、自信をつけた小川さんは、さらなるキャリアアップを目指して、フルタイムの雇用を

してくれるという、知り合いの美容室に転職する。しかしそこで小川さんは、二回目の手術、つまり完全に失聴するという経験に見舞われる。

二度目の手術 二度目の挫折

「音を失うという想像ができなかったですね。確かに聴力は少しずつ下がっていましたが、なんとか努力すれば会話はできていましたから」。「聞こえなくなる」といつても、どこか他人事という感じがしていた。「いざ『手術しましょう』と言われた時もピンとこなくて」。どこかでまだ、半信半疑な部分があった。「実際、手術台に乗って、目が覚めたその時、全く何も聞こえなくなっていて。話しかけられても気づかなくて。それではじめて『あつ、本当に聞こえなくなったんだ』と思いました」。完全に失聴したことを実感した時のショックは、大きかった。

迷惑をかけることが怖かった

さらに小川さんに追い打ちをかけたのが、オーナーから「今の状態では、現

場に立つのは難しいのではないか」と言われたことだった。「二度目の手術の後、まったく聞こえなくなるので、お客さまとのやり取りは筆談が中心になる、ということとは伝えていました。その前提でいろいろ準備していたので、手術後はすぐに職場に復帰するつもりだったのですが……」。聞こえなくなっただけでなく、顔面のまひや滑舌などの障害が残ったことも、オーナーが、復帰が難しいと考えた理由のようだった。

納得はいかない。しかし、受け入れる以外の選択肢はなかった。「障害という負い目を感じていたからか『お客さまに迷惑をかける』と言われてしまうと、何も言えなかったです」。サポートしてくれる、応援してくれると思っただけに、ショックは大きかった。「抜け殻のようでした。頭の中が真っ白になつて……」。

しかし、一回目の手術後のように、外に出られなくなる、ということはない。なぜなら小川さんは「スタイリストとして、仕事を続けたい」という自分の強い思いに、もう気づいていたからだ。「ショックでしたけど、今度はすぐに仕事を探しはじめました」。前回と同じように、五〇〜六〇件連絡をした。





オーナーの浅川雅之さん

「ことごとくダメで。面接すら、させてもらえない」。ハローワークにも行つた。「ハローワークには、障害者雇用でのスタイリスト募集はなかったんです」。

「もう一度、スタイリストとして働きたい」という気持ちだけで走ってきたが、心が折れそうになった。

同じ立場の人を支えたい

そんな時、出会ったのが、ルピナスヘアの求人だった。「障害者と一緒に働ける店をオープンする、ということ」をハローワークで聞いて。そこでオーナーと出会えたことが、今こゝで、スタイリストとして働けていることにつながっています」。

今、小川さんは、ルピナスヘアの専属スタイリストとして店を切り盛りする一方で、アシスタントとして働く、同

じくろう者の、松塚資子さんを指導する立場でもある。「自分は中途失聴ですが、松塚さんは生まれつきのろう者。彼女の夢を実現できるように、私や他の人と同じようにスタイリストとして働けるように、手助けしていきたい」。

取材の前にお店の外で撮影をしていると、一人の男性が、小川さんに声をかけてきた。「同じ商店街でお弁当屋さんをやつていらつしやるんです。いつもよくしてくださつて。実は、あの人も障害があるんです」。片耳が聞こえず、また目も悪いそう。さらに数年前に、がんの手術をしたという。「お店には私と同じようなろう者はもちろん、さまざまな障害を抱えた方が来店されます。中には遠くから、車で来られる方もいらつしやいます」。近くの美容室では、障害を理由に来店を断られることも多いという。ルピナスヘアには、特別な設備などはほとんどないが、障害があるからといって来店を断ることなく、それぞれ個別に、できるかぎりの対応をする。浅川さんの思い、小川さんの経験が、店内に、にじみ出ている。だから、「ルピナスヘア」は、誰

